高野山の鳥類に就て

榎本佳樹

一、高野山は何故に禁獵區と成つたか

高野山は鳥類の棲住實數に於て余り豐富な方でない、殊に中秋から年末迄の間は、蕃殖の爲めに他地方から來て居た鳥類は悉く去つて居らず、常住種類の中にも一時近隣の低い地へ移住するものがあり、又冬季の渡り鳥も澤山の種類が來ないから、棲住實數に於て甚だ少くなる、其上此時期には何れの鳥類も余り囀らず靜かであるから、實際よりも以上に鳥類の少い感じがして寂寥を極める。

然るに春夏の候は一般鳥類の繁殖期であるから、常住鳥類の中で早いのは、一月初旬頃から繁殖期に於ける特異の鳴聲を發し、或は音響などを出すものがあり、又一時近隣地方へ移住して居たものも大抵は一月末頃から二月末頃迄の間に歸つて來て、烈しい寒さを物ともせず囀りを始める、而して其後寒さがだんだんと薄らぐにつれて鳴き方も盛んになつて來る、加之三月末頃から五月末頃迄に亘つては、遠い南方から種々の鳥が繁殖の爲め渡つて來て夫々特異の戀歌を唱へる、從つて三月末頃から六月下旬頃迄の間は、最も多く鳥の聲を聽き得る時期で、冬の寂しさに反して頗る陽氣である、尚又此時期は高野山に於ける氣候最良の時であるから是等澤山な鳥の美しい鳴聲や愛らしい姿によつて風致を增されることも尠くないのである、それから後は一部のものゝ外はだん〳〵と鳴き方も減つて行くが、一般幼鳥は益殖して來て、八月末頃には鳥類棲住實數は一番多くなる。斯樣に春夏の候、高野山で繁殖する鳥類は比較的澤山であつて、而も其大部分は益鳥であるから、鳥類の多棲地ではないが、鳥類保護增殖上重要な地点の一と認められ、且つ又、宗教上の靈地として風致保存上の必要もあるので數年前から禁獵區に制定せられたのである。

二、類別と名稱

當地方鳥類を鳥學上の分類法により、目、科、屬等に分ち記述しても、稍專門的になつて普通の人には判り易くない点がある。それで棲住や渡りなどの狀態によつて類別して見ると、常住するもの、一定季節間來住するもの即ち渡り鳥、渡りの爲め一時通過するに止まるもの、及び常に他地方に棲住して不定期に出現するものの四つに大別することが出來るが、更に是等の各を細別すると、常住するものには(1)當地方に定住して他地方に移住せざるものと(2)一年の大部分棲住し短時期間近隣の地方に移住するものとあり、渡り鳥には(3)春夏の候に來て繁殖し秋南へ歸るものと(4)秋冬の候來て越冬し春北方へ歸るものとあり、通過鳥類には(5)單に上空を通過するに止まるものと(6)通過の途中短時期間滯在するものとあり、不定期に出現するものには(7)遠隔せざる他地に常住或は渡來して居て不定期に現れるものと(8)遠距離から迷ひ來るものとがある。

當地方鳥類の全部約八十種を右記の分け方によつて夫々種數と名稱を列擧すると(1)に相當するもの(以下『相當するもの』を略す)十九種、即ち、クマタカ、ノスリ、キジ、ウズアカヤマドリ、キジバト、フクロウ、アヲゲラ、カンサイオホアカゲラ、シコクコゲラ、ウグヒス、ミソサヾイ、ゴジウカラ、シヾウカラ、ヒガラ、ハシブトガラス、ハシボソガラス、カケス、スヾメ、ホヽジロ、(2)六種、即ちキセキレイ、セグロセキレイ、ヤマガラ、エナガ、メジロ、コカハラヒワ、(3)十八種、即ち、サシバ、チウヒ、アチバト、カツコウ、ホトヽギス、ブツポウソウ、アカセウビン、アヲバヅク、コノハヅク

「野鳥」1960 年 25 周年記念特集号から複写引用

榎本 佳樹（1873～1945）

徳島市生まれ。陸軍幼年学校から士官学校に進み、1897(明治 30)年以降、1911(明治 44)年まで軍人生活を送る。1916(大正 5)年、日本鳥学会入会。1917(大正 6)年、高野山中学に奉職。16 年間を高野山で過ごされ、付近の鳥類調査を実施。1933(昭和 8)年、山を下って大阪に転居、大阪支部の実地指導者となる。

1945(昭和 20)年1月急逝。その 6 ケ月後の大阪大空襲で都島にあった自宅が炎上し、未発表の資料等が焼失した。

著書に、「野鳥便覧」の他、「野の鳥の思い出」があり、又、動物学雑誌、鳥、野鳥、農林省発行の鳥獣報告集等に数多くの報告、論文を残されている。

ヨタカ、コサメヒタキ、キビタキ、オホルリ、センダイムシクヒ、ヤブサメ、ツバメ、コシアカツバメ、サンセウクヒ、キバシリ、(4)十七種、即ち、オシドリ、ハイタカ、ツミ、ヤマシギ、ビンズイ、ヒヨドリ、シロハラ、ルリビタキ、ジヤウビタキ、モズ、キクイタヾキ、イカル、マヒワ、ウソ、ベニマシコ、アトリ、アヲジ、(5)二種、即ち、ムナグロ、キアシシギ、(6)二種、即ち、ツヽドリ、ツグミ(7)九種、即ち、コヤヽジロ、サヽゴキ、ゴキサギ、イヌワシ、カハセミ、アマツバメ、サンクワウ、ラウ、イハツバメ、ミヤマガラス、カシラダカ、(8)五種、即ち、オホミヅナギドリ、ウミツバメ(種類不明、目擊)イカルチドリ、クサシギ、コガラ。上記の中で(8)は不定のもので何時如何な種類が何處から來ると定まつたものでないから、今迄に記錄されてある種類を示したものであつて、將來今迄の記錄にない種類が出現すればそれだけ增加すべきものである。又(1)から(7)迄のものと大抵は調べ盡した筈であるが、棲住獸極めて少數で且つ習性上人に知れ難い樣なものが漏れて居らぬとは斷言出來ない、然しながら、今後當地方で新に發見されるとしても、それは從來我國鳥類として記錄されてあるものゝ何れかに相當するものであるか、乃至は夫等の新亞種と認め得るに過ぎないもので、全然新種である樣なことは殆どなからうと思ふ。尙今後一層詳しい調査をすれば(1)から(8)迄の間で少しは相互の異動を生せぬとも限らぬ、是は鳥類が移動性に富んだ動物であるから止むを得ないことである。

三、高野山の重要鳥類　其の一

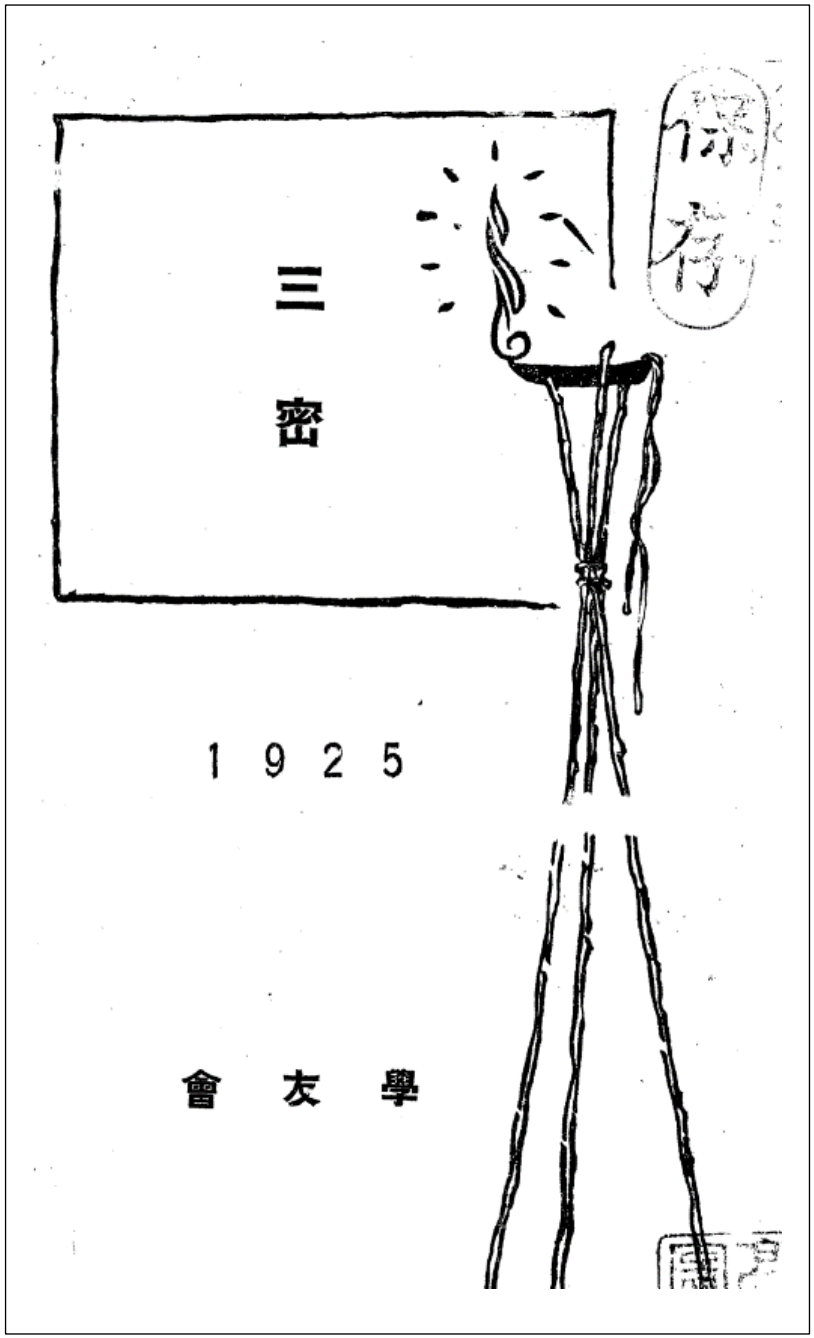
當地方鳥類は前述の如く全部で約八十種あつて、此數は當地の植物や昆虫などの種類數に比べたら遙かに少いものであるが、一々說明をすることになると、簡單に書いても、隨分長くなるから、止むを得ず、當地で最も名高いブッポウソウに就いて概畧を述べ、他は後日に讓ることゝする。

ブッポウソウは我國では古來靈鳥とせられ、其の棲住地として知られて居るのは高野、木曾、日光、秩父、比叡、四國、九州、琉球等で、又近年は木曾や九州中部などに可なり多數渡來すると稱せられ、更らに對馬、濟州島、朝鮮、越後、陸奥等續々と棲住地が新に知られ來るから、將來是等以外の諸地方にも棲住することが知れるであらう、從つて本種は我國全般に於て今迄稀珍しがられぬ樣になるかも知れぬ。然るに、我高野山は從來我國で知られてゐる棲住地の中で特に有名な場所であるに拘らず、近年其數が殖えないばかりでなく、棲住區域が益々減縮して行く傾向があつて、將來或は全く姿を沒し其聲も聽けなくなり、當地に於ける過去の名鳥として只記錄にだけ殘される樣な時代が來はしないかと思はれて甚だ心細い。此棲住地域減縮は主として聽聲者の激增と老大樹の減少とに基因するものと察せられる、近來本種の鳴聲を聽かうとする人の多くなつたのは世人に科學方面の知識慾が盛んになつた實証であるから善いことではあるが、折角珍鳥として其の神秘的な美聲を聽かうと思ふならば成るべく靜かに行動する樣に注意せねばなるまい、參々伍々群をなし下駄音高く濶步して鳥の棲家に近い所迄行き、大聲を揚げて放歌談笑したり、或は口笛やハーモニカなどを鳴らし、又は瀨りに煙草を吹かしたりなどするのは何れも鳥類を脅威壓迫する行爲であつて大禁物である、斯くの如きことを遠慮なくやつて居ると、鳥は益々人間から遠ざかつた場所へ逃げて行かねばならず、且つ繁殖も妨害せられることになるから遂には渡來せぬ樣になる。又老大樹を無暗に伐採すると、營巢の場所や隱れ場などを失ひ、且つ餌食となる昆虫類も減るから是亦鳥の爲めに甚だよくない。

本種は樹木に有害な昆虫類やそれ等の幼虫を餌とするから益鳥として保護されて居る、食する昆虫の中で甲虫の甲殼の樣な堅くて不要の分は吐き出すことが多い、又幼鳥にはシヾミの貝殼を與へるらしい。昆虫を捕へるには高い展望のよくきく樹梢上（多くは枯れたる）にとまり視張つて居て近傍へ來たものを急に飛んで行て銜へることもあり、或はツバメの樣に飛翔中に捕へることもある。

巢は通常喬木の空洞に造り、地上からの高さは六間乃至九間位が普通で、內部には少許の樹皮を敷くに過ぎない。卵は三個乃至四個で球形に近く白色である。產卵期は六月上旬から中旬迄の間で、卵

榎本佳樹と高野山
　1917(大正6)年から1933年(昭和8)年3月にかけて高野山中学で教鞭をとられるとともに、農林省の委託を受け付近一帯の鳥類を調査し、高野山の野鳥に関する貴重な記録を多く残されています。
　ここでは、高野山中学の学友会の会報「三密」の記事を紹介しました。



大正十五年四月十日印刷
大正十五年四月二十日發行
（非賣品）
和歌山縣高野山中學內
編輯兼發行者　篠　大道
印刷者　齊藤幸助
和歌山縣妙寺町
印刷所　齊藤印刷所
和歌山縣
發行所　眞言宗高野山中學學友會文藝部

は七月上旬頃孵化し、雛は同下旬に巣立して、八月下旬から九月上旬の間に親仔共越冬地へ歸る。
　越冬地はフイリツピン、ボルネオ、ジヤバ、セレベス等が主なるものである。當地へ來るのは四月下旬頃で、特有の鳴き聲は通常五月下旬頃から始め、六月中旬末頃迄盛んに鳴くが、それから七月中旬末頃迄の間は抱卵や育雛の時期で忙しいのと、梅雨期で惡い天氣が多いのとで余り鳴かず、其後は再び鳴いて八月中旬乃至同下旬迄續ける。
　鳥の大さは鳩より少し小さく、大体の形は鳥に似て居ると云つてよからう。嘴は長くないが基部は幅廣く上嘴先端は少し釣曲して居る、頭は寧ろ大きい方で少し扁平である、頸は短かく、尾羽は中等で、翼は長大、脚は短かく趾は比較的長い。嘴の色は華麗な朱紅色で先端黑く、脚も亦美しい、紅色で爪黑く、尙眼瞼も赤色で、光彩は褐色である。頭と顏の大部分は帶紫青黑色、脊部と雨翼覆は濃青綠色、腮と喉は淡い瑠璃色の地に青紫色の縱斑があつて美しく、胸以下の下面は青綠色で脊より遙かに淡い、翼の風切は紫黑色で、外方六枚に銀青色の淡色部があつて、翼を擴げると顯る著明な一大班紋に見ゆる、尾羽は紫黑色で基部外緣は青色である。要するに、熱帶鳥類特有の濃厚で且つ光澤に富んだ色彩を有する美麗な点に於ても亦靈鳥たる價値を備へて居る。幼鳥は一体に羽色が親鳥程鮮明でなく、殊に喉の縱班は不明で、嘴や脚は赤色が淡く褐色に近い。本種は剝製にして置くと色が褪せ易く又現今我が國では剝製法が下手で、生活時の体勢を模倣し得ないから、立派な剝製標本を見ることの出來ないのは遺憾である。